

稲荷山古墳出土土器の器種構成と出土位置に関連して

杉 崎 茂 樹

はじめに

稲荷山古墳は、埼玉古墳群中最古の前方後円墳で、さきたま風土記の丘整備事業で建設された、さきたま資料館の展示資料を得る目的で昭和43年8月に後円部墳頂が発掘された。発見された2基の埋葬施設のうち、粘土槨は盗掘を被っていたものの、礫槨からは金錯銘鉄剣を始め、武器・武具、馬具や装身具類が出土した。

そして、上記の発掘時の航空写真で長方形に二重の周溝が廻ることがソイルマークで判っていたが、昭和48年度に要所のみのトレンチ調査後、公園整備の一環で内堀が復原された。この時は各種の埴輪類と少量の土器類が出土している。

また、平成9年度から13年度までは昭和12年に削平された前方部を復元すべく、再び周溝各主要部分が発掘調査され、埴輪や土器等が発見された。その成果は平成18年度に整備事業報告書（埼玉県教育委員会2007、以下、「18年度報告書」と略。）として発刊されている。

稲荷山古墳の築造年代を考える拠となるのは、金錯銘鉄剣の「辛亥年」がその一つ、そして「辛亥年」と製作年代観が整合する土器、とりわけ須恵器がもう一つの根拠として取り扱われる。上記18年度報告書作成時に諸事情により出土土器について十分に取り扱いえなかった部分があった。本稿ではこれを補い、かつ、その出土位置と遺構との関係や器種構成等について若干の分析を行いたい。

1 稲荷山古墳出土土器とその出土位置

これまでに稲荷山古墳から出土した土器の出土調査区は第1図のとおりである。各箇所出土土器の概要を以下に記す。（写真は新たに撮影したものだが、実測図は特に記さない限り報告書からの転載であることをおことわりしておく。）

ア 昭和48年度調査時出土土器（第3図）

この時の出土資料としては土師器坏2点と甕破片3点、須恵器大甕口縁部1点である。報告書（埼玉県教育委員会1980）によれば、「四トレンチ造出し部分」の「周濠覆土からの発見」とある。「四トレンチ」とは後円部西側の中堤に付設された造出しを確認するためのトレンチ群で、第2図に示した中堤西造出し周囲の外堀または内堀覆土からの出土ということになる。

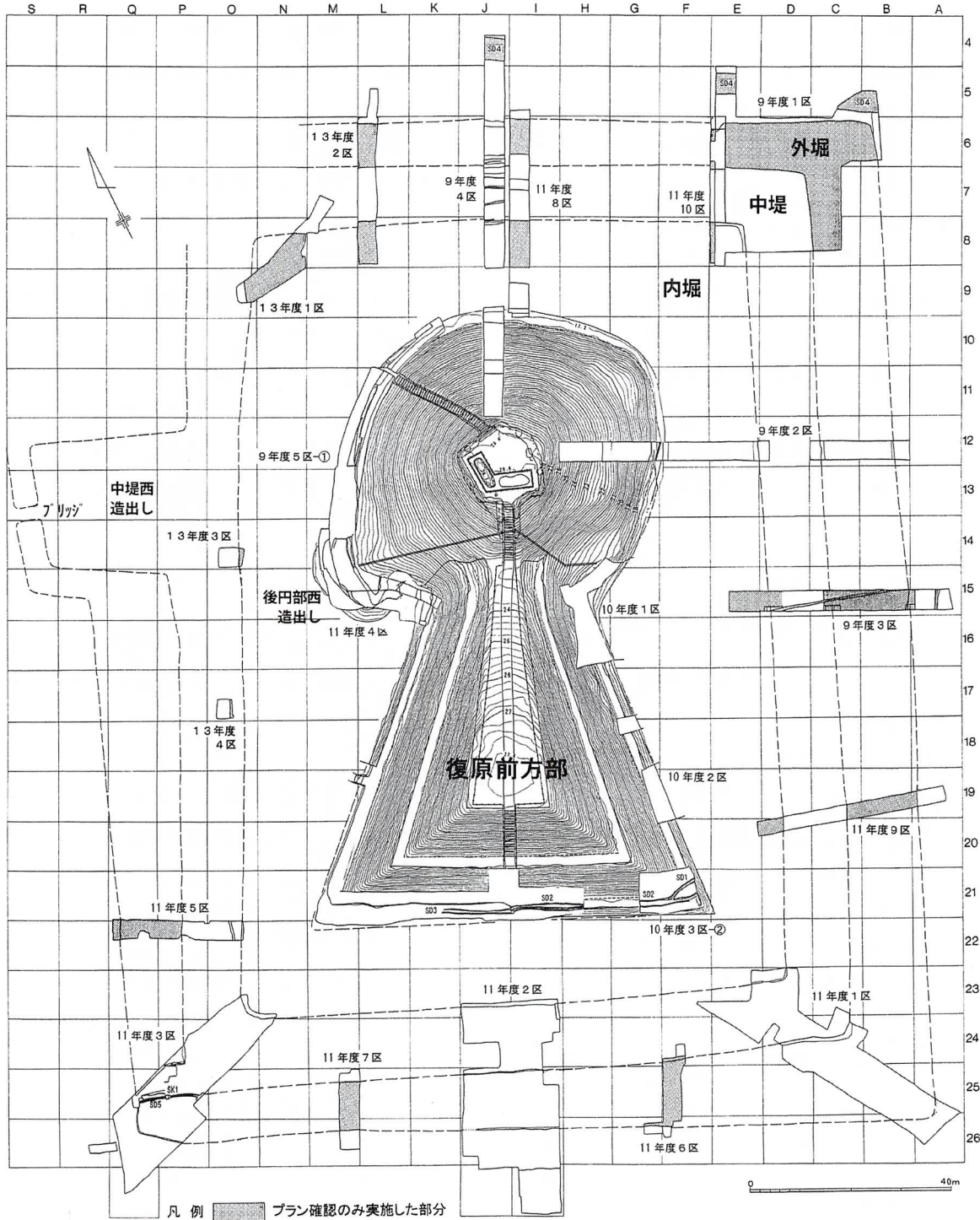
報告書はまた、須恵器甕片を6世紀後半から7世紀に下しうる可能性を記述するが、稲荷山古墳に隣接して当該期の遺構が無いので、ひとまず古墳に伴う可能性を考えておいてよいのではなからうか。

イ 平成9～13年度調査時出土土器（第5、7、8図）

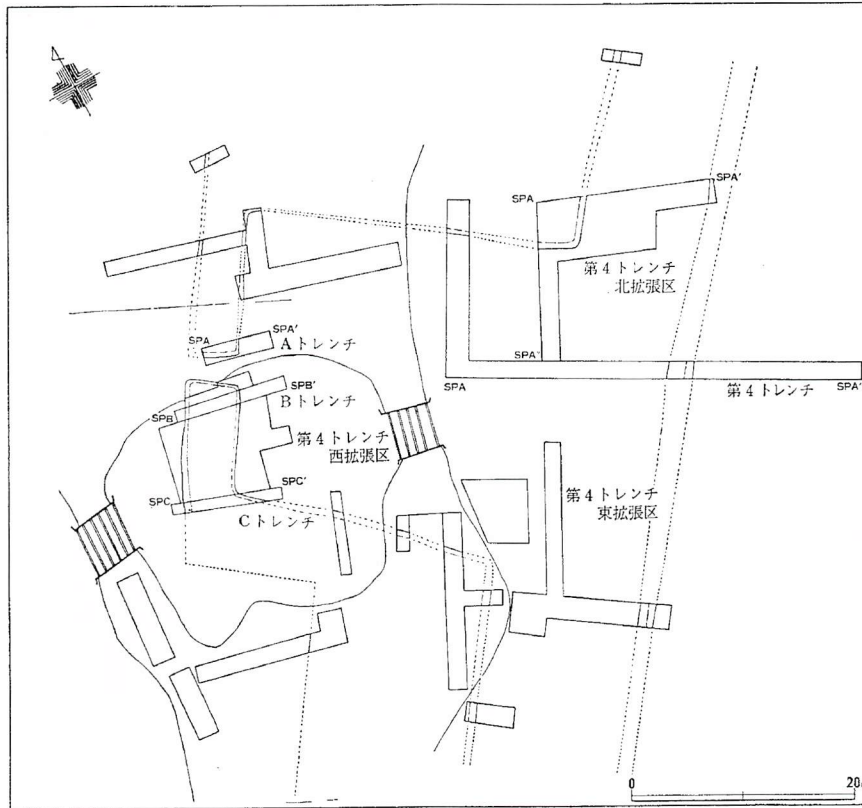
前方部復元整備事業の調査は、内堀の範囲表示を念頭に内外の周溝の具体的な位置を把握するために平成9～11年度、及び平成13年度に実施された。このうち土器が出土しているのは平成9年度では1区と5区、平成11年度では1区と平成9年度の5区に隣接する4区である。（第1図）

・平成9年度1区（第4図） 1区では、内堀コーナー部の堀覆土中から土師器高坏5個体（第5図4～8）、坏4個体（第5図9・10・12・13）と須恵器無蓋高坏小破片2片（第5図17・19）が

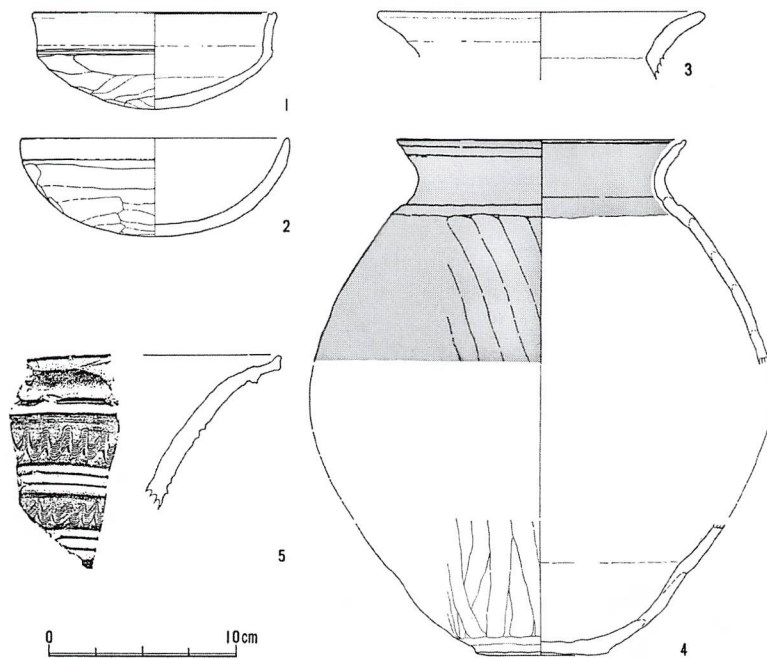
出土した。土師器の高坏はいずれも坏部が途中で屈曲して外湾して開き、脚部が筒状の体部から外方に直線または屈曲気味に開く形態のものである。図示できたのは5点だが、細片があって、さらに数個体の共伴が推定できる。土師器坏は須恵器の模倣形態（以下、模倣坏と略。）で口縁端部などは比較的忠実に模倣している。須恵器無蓋高坏は、口縁部外面の段直下の体部に櫛描き波状文を施文するのを特徴としている。17と19は断面の形状が類似するが、櫛描波状文の状況からは別個体の可能性が高い。両方とも外面に自然釉がのっており焼成はよい。これらの土器は破片となって中堤から流入するように出土しており、須恵器無蓋高坏と土師器高坏、模倣坏群を主体とした祭祀が、中堤上で行われていた可能性が高い。



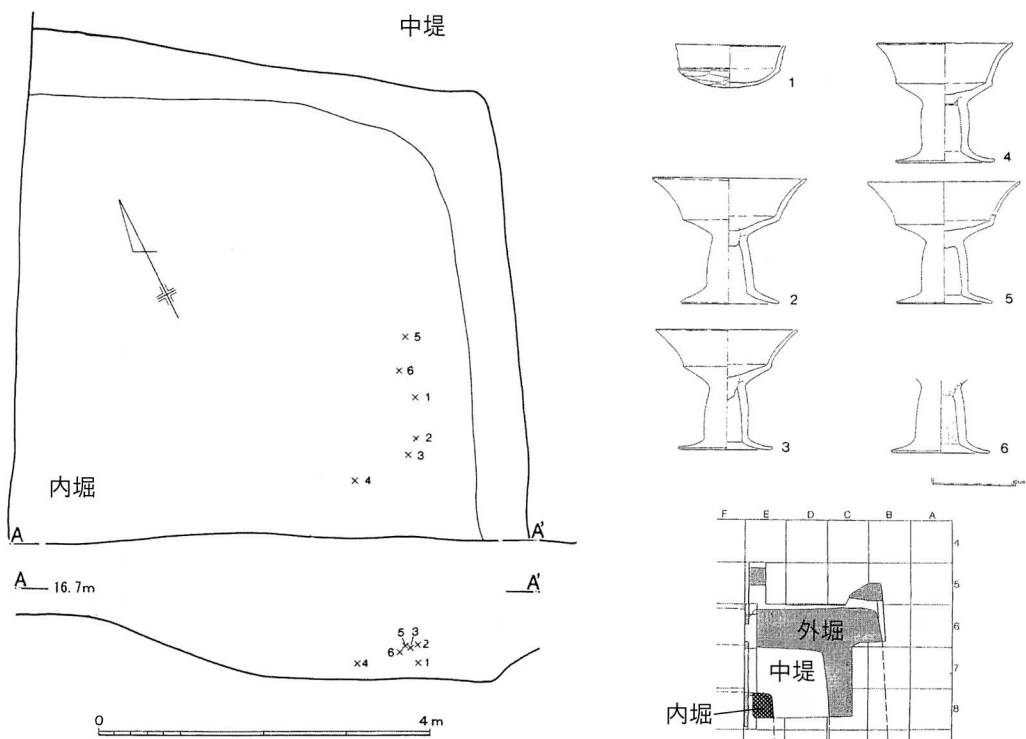
第1図 平成9～13年度発掘調査位置（埼玉県教育委員会2007より）



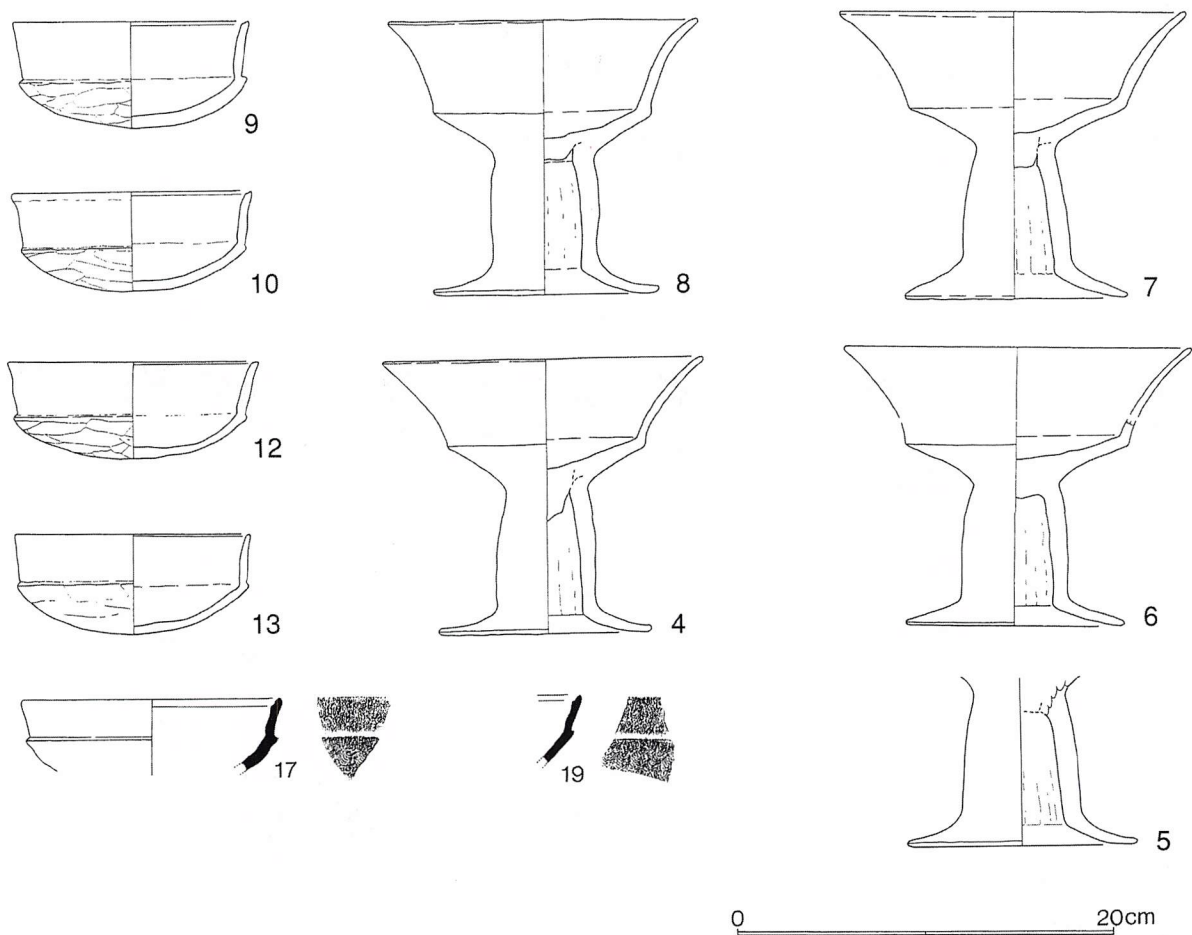
第2図 昭和48年度中堤造出し調査トレンチ配置図（埼玉県教育委員会1980より）



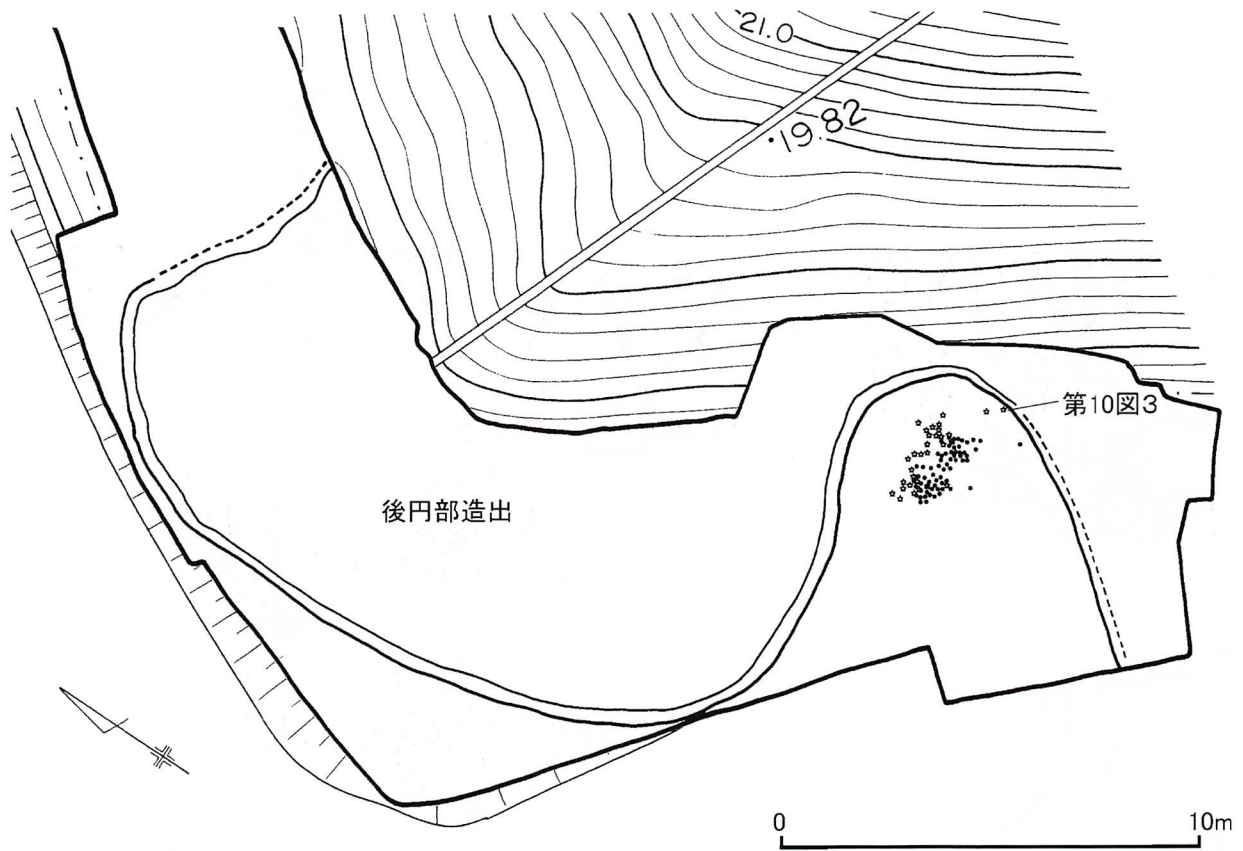
第3図 昭和48年度出土土器（同上）



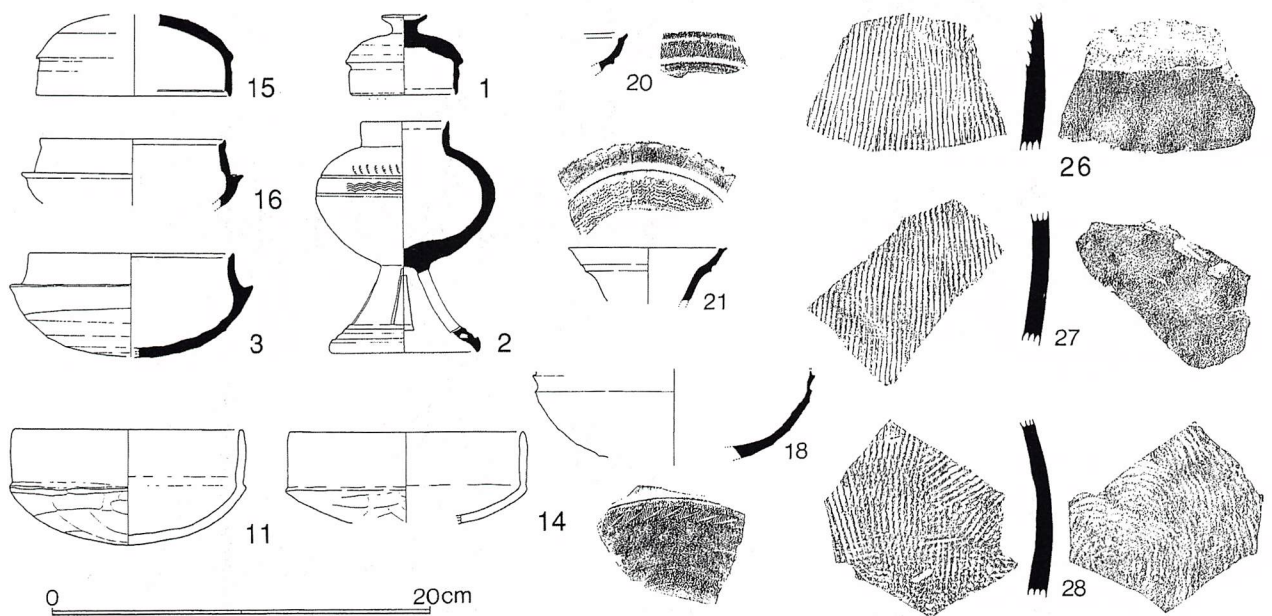
第4図 平成9年度1区土器出土位置図（埼玉県教育委員会2007より）



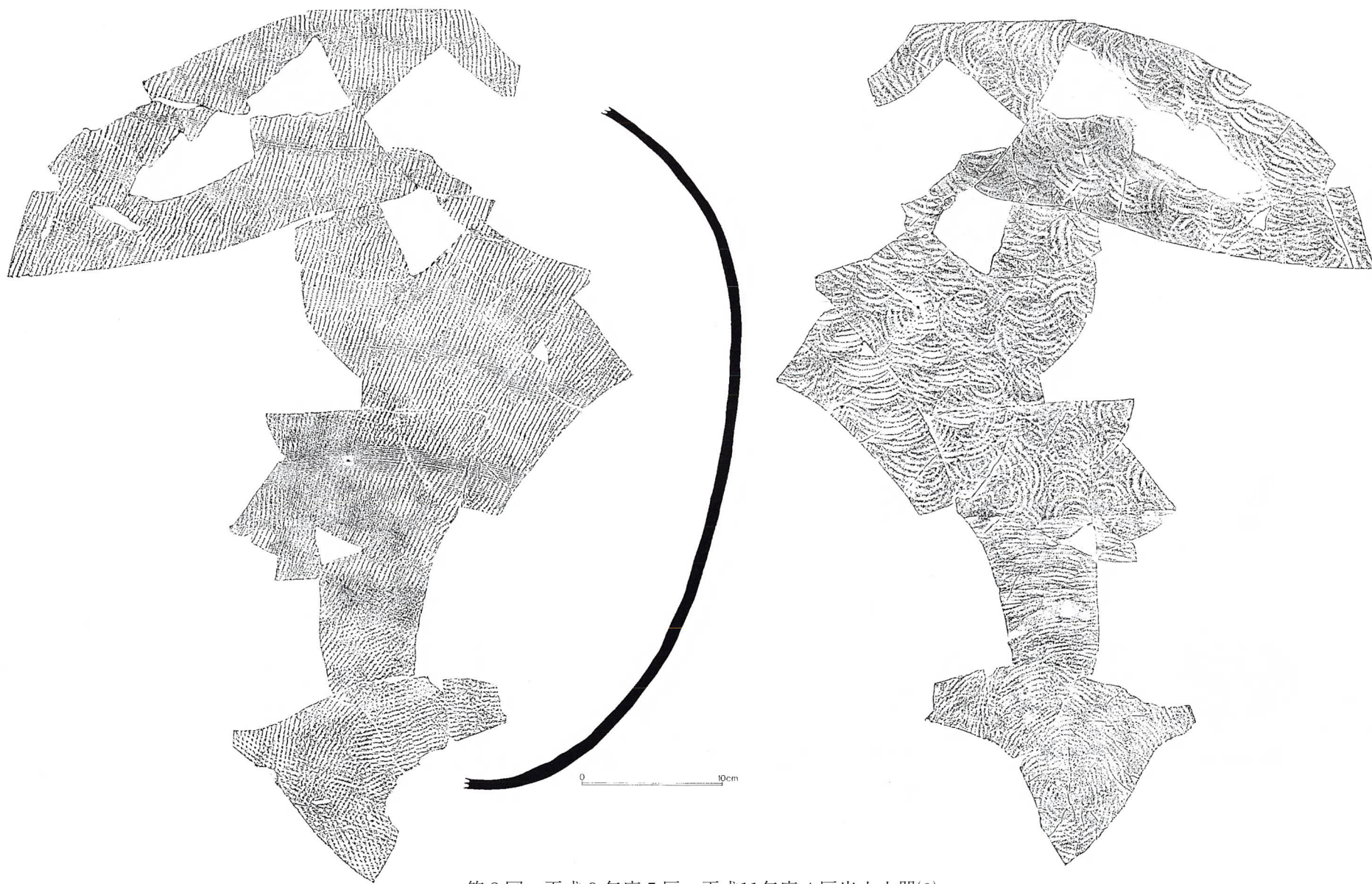
第5図 平成9年度1区出土土器（同上）



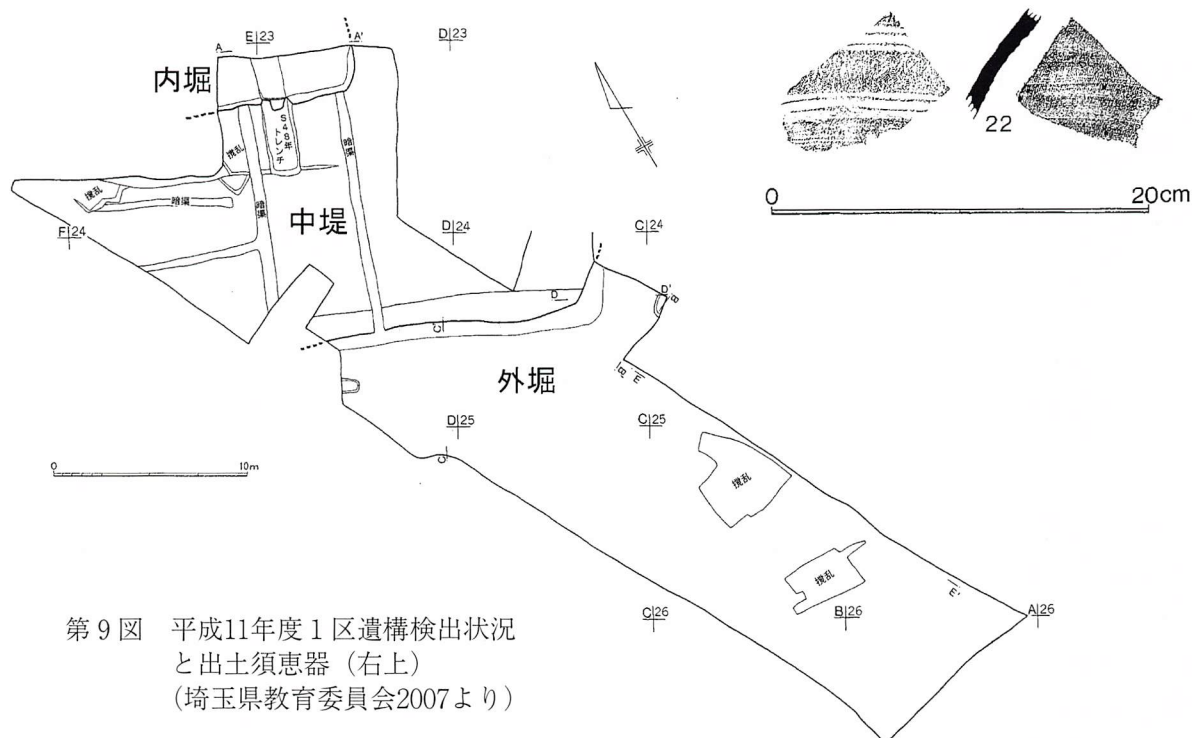
第6図 平成9年度5区・11年度4区土器出土位置
 (●は第7図28・第8図の須恵器甕、☆はその他の須恵器出土位置)



第7図 平成9年度5区・11年度4区出土土器(1) 28は第8図の須恵器の一部(底部)
 (埼玉県教育委員会2007より)



第8図 平成9年度5区・平成11年度4区出土土器(2)



第9図 平成11年度1区遺構検出状況
と出土須恵器（右上）
（埼玉県教育委員会2007より）

・平成9年度5区・平成11年度4区出土土器 平成9年度5区と平成11年度4区からは須恵器が集中的に出土した箇所があった。それは第6図に示す後円部造出しと括れ部間の周溝覆土中からである。第7図15の坏蓋は報告時には口径9.8cmとしたが、焼けひずみが認められるのもう少し大きく考えてよいかも知れない。天井部を欠いているので、底部を欠く16の坏身ともども高坏の可能性も残される。同3の坏身は底部の中央部を欠く。18は無蓋高坏破片。同1・2は有蓋脚付短頸壺で、蓋の口縁・体部は薄いが天井は器厚があり、稚拙な感触が漂う。これは本体の壺部の口縁部が薄い作りでありながら底部が厚いのと同様である。同20・21の甕と思われる口縁部2点は厚く自然釉がのっている。以上の詳細は18年度報告書も参照していただきたい。

このほか、18年度報告書で掲載しなかった細片の須恵器には坏または高坏の蓋と身がさらに数片確認でき、有蓋高坏の円窓を有する脚片も確認できた。（写真4）

また、甕破片を何点か報告したが、その後、接合資料が確認されたので少し記述しておきたい。（第8図、写真2）

この地区出土の須恵器片中にこの甕の口縁部は見いだすことができず、体部上部～底部の破片が接合してその部分の形態が判明したものである。第7図28にさらに破片が接合して、これが底部とわかった。体部全体の1/4～1/5くらいの遺存状態であろう。形態的特徴としては胴部中上位が丸みをもって緩く張り出して最大径を有し、底部は丸底で、所謂「倒卵形」の体部となる。遺存部分での高さは図上で50cm、最大径は約53cm前後と推定した。胎土にも石片などの混ざりものもほとんど認められず、大きさの割には器厚が薄くて焼けしまりも非常によい。底部付近では厚さ約8mm前後、他の部分では7mmくらいで、薄い部分は5mmを切る部分もある。外面は縦方向の平行タタキメが残り、その上に狭い部分で約3cm、広い部分で約5cmの間隔で不整に横走るカキメを施している。平行タタキメは底部では方向が乱れていて、カキメは施されていない。内面は同心円タタキメが残るが、一部に磨り消されたような状況が見て取れる。

また、この地区から出土した高坏蓋の破片が稲荷山古墳出土と伝えられる資料と接合して、これが稲荷山古墳出土品と確定した。（第10図3）

この地区からは土師器坏も2個体の出土があった。いわゆる模倣坏であるが、口縁端部は面を形

成しないで丸く仕上げしており、平成9年度1区出土の土師器坏群より後出的な特徴を有する。

ウ 平成11年度1区出土土器

前方部東南コーナー部の調査では内堀と中堤のコーナー部が検出されているが外堀の外側コーナーは未検出である。調査区外堀の覆土中から須恵器大甕の口縁部破片が1点出土している。(第9図22) この地区出土土器は僅かにこの1点のみである。第7図26、27の体部破片と胎土・焼成が似ていて、同一個体の可能性も考えられるし、中堤コーナー上または外堀外方に据えられた個体の一部の可能性もあろう。

2 「伝稲荷山古墳出土須恵器」と接合した発掘調査出土資料

ここで「伝稲荷山古墳出土須恵器」、すなわち稲荷山古墳出土と伝えられている、地元行田市埼玉在住の川鍋氏所有の須恵器と接合した須恵器片について触れておきたい。川鍋氏所有の土器群は氏が稲荷山古墳の前方部が採土工事で失われた時に、括れ部付近から出土したものを採集したとされるもので、須恵器有蓋高坏やその蓋を主体として、坏蓋など合計20点と土師器の壺が1点である。(以下「川鍋氏資料」と略。)

平成9年度出土の須恵器破片の一片が川鍋氏資料の有蓋高坏の蓋と接合することが判明しており、このことは既に公表されている。第10図の3の矢印を付けた枠囲いがその実測図である。これにより、この高坏蓋が稲荷山古墳出土の確証が得られたことになる。しかしながら、接合した破片の調査時出土地点は前方部に近い位置であり、伝えられる「括れ部付近出土」をさらに「後円部西側の造出し」からの出土と限定できる状況とはなっていない。ただし、出土レベルは標高が16.4mと周溝底からかなり浮いている。

須恵器破片は後円部造出し周辺から比較的多数が出土しているが、今のところ川鍋氏資料と接合するものは見だせていない。しかし、それらは川鍋氏資料と胎土がよく似ているものが多く(写真4)、その他の川鍋氏資料も埼玉稲荷山古墳の後円部造出し付近出土の蓋然性が高まったと言える。

ここで川鍋氏資料のうち、甕について触れておきたい。甕体部には円形の穿孔があり、その上方の体部外面(肩部)には自然釉が厚くかかっている。その自然釉のかかる下部が連続して弧を描くような状態であることに気づいた。くぼんだ中に平行する櫛描沈線と思われる箇所も観察でき、釉が波状文の窪みにたまっている状況と判断されるのだが、上方ほど釉が厚くかかり、詳細はわからない。肉眼では確認に限界があり、今回は指摘するのにとどめる。(写真3)

3 出土土器の復原される器種構成とその性格について

以上、稲荷山古墳各場所での出土土器とその構成をまとめると以下のとおりである。

出土位置	推定元位置	須恵器の器種	土師器の器種
中堤造出し周辺周溝内	中堤造出し上の可能性大	大甕(1)	甕(1)、壺(1)
北東コーナー周溝(内堀)内	北東コーナー中堤上	無蓋高坏(2)	高坏(5) 須恵器模倣坏(4)
後円部造出し周辺周溝(内堀)内	後円部造出し上	有蓋脚付短頸壺(1) 坏(1)・蓋(2+1) 有蓋高坏(1+10)・蓋(1+6) 無蓋高坏(1) 甕(2+1) 大甕(2)	大型高坏(1) 須恵器模倣坏(2) 壺(+1)
前方部東南コーナー外堀周溝内	前方部東南コーナー中堤上? or 外堀外方?	大甕(1)	

※ ()内は発掘調査で確認できている個体数。+は川鍋氏資料の数。

上記表の推定元位置は、本来使用されたか、あるいは居据えられた可能性のある直近の遺構である。川鍋氏資料の須恵器坏、有蓋高坏・蓋、甗、土師器壺は上述したとおり、後円部造出し上にあった可能性がきわめて大きくなった。(表中に「+数字」で示した。)

現在までに稲荷山古墳で実施された周溝調査はトレンチとその拡張区を加えた程度の調査であり、周溝内全てが発掘されたわけではない。しかしながら、後円部造出し周辺からの須恵器、土師器の出土点数は他の場所に比べ群を抜いていると言えるだろう。

土器は食材の盛りつけや酒などの液体を入れて保存することがその第一義的機能である以上、古墳から出土する土器は被葬者に対する飲食物の供献や共食儀礼が主用途であろう。土器そのものが被葬者の愛用した装身具や武器などと同様なレベルの副葬品であるケースは少ない。

稲荷山古墳の場合も土器が多数出土する後円部造出し上が供献、共食儀礼行為の一番の中心となった場であったと結論づけられる。そして、中堤も単なる土手(堤)施設でなく、儀礼行為の行われる舞台であったことは、古墳群内の瓦塚古墳前方部西側中堤上が各種の形象埴輪を樹立した祭祀行為が行われたことから理解される。(埼玉県教育委員会1986)

ここで、埼玉古墳群内の前方後円墳で土器の使用位置が推定できる例を参考に見てみよう。

6世紀前葉に築造されたと推定される二子山古墳(墳丘主軸長137m)は、稲荷山古墳に後続する古墳群中の最高首長墓で、前方部西側の括れ部寄りに造出しが付設されていて、稲荷山古墳とは墳丘付設造出しの位置を異にしている。この造出しではTK47~MT15期の須恵器大甕、壺、器台、提瓶、甗の破片が表面採集されたり、周辺の周溝中から出土したりしていて、稲荷山古墳後円部造出しで行われた飲食物の供献、共食儀礼が同様に、この造出し上で実行されていたものと思われる。(埼玉県教育委員会1992)

6世紀後半の將軍山古墳(墳丘主軸長90m)では墳丘西側が広範囲に面的に発掘調査が行われている。將軍山古墳には稲荷山古墳後円部とほぼ同様の位置に造出しが造られており、TK43期と考えられる大甕(4個体、以下数字のみ記す)、壺(4)、脚付長頸壺(1)、有蓋長頸壺(1)、提瓶(1)、高坏(1・脚付壺の脚部か?)、甗(4)、土師器坏(3)が覆土や周辺の周溝中から出土している。(第11図)造出し南部では小形の器種、北側では甕が多く出土していて、盾、靱や多くの円筒埴輪も出土していることからこれらの埴輪が樹立された区画中で、稲荷山古墳同様、供献・共食儀礼が執行されていた可能性が高い。中堤の造出し付近では円筒埴輪や盾持人物、馬形埴輪が出土していて、葬送祭祀が行われているが、周囲の周溝内を含めても土器類の出土があまり無く、土器を大量に使用した祭祀は行われていなかった可能性が高い。(埼玉県教育委員会1997)

埼玉古墳群では6世紀前半代に最高首長墓の下位首長墓と想定される前方後円墳が築造されるようになる。そのうち瓦塚古墳(墳丘主軸長73m)では墳丘周囲が面的に広範囲に調査されている。墳丘に付設する造出しが、二子山古墳同様、前方部西側括れ部寄りの位置にあることが明らかになっており、造出し上とその周辺から土器が出土している。

須恵器はTK10期の所産と考えられであり、大甕(3)、甕(1)、壺(1)、脚付壺・脚部(1)、器台(1)、高坏(1)、提瓶(1)が確認された。土師器は坏(2)と埴(1)が出土している。(埼玉県教育委員会1992)

この他の古墳群内の前方後円墳で、造出しの位置が判明しているのは奥の山古墳で、稲荷山古墳同様後円部西側に付設されている。また、鉄砲山古墳では二子山古墳同様に前方部西に造出しの付設が推定されているが、奥の山古墳同様、土器の出土は知られていない。(愛宕山古墳や中の山古墳については不明である。)

以上の例から、埼玉古墳群内の前方後円墳の造出しと土器の出土についてまとめると、大型前方後円墳、中小規模の前方後円墳のいずれにおいても、各種大量の須恵器を主体とし、これに土師器を加えた土器群を用いた、被葬者への供献・共食儀礼の場所としての性格が、墳丘付設の造出しに

あったことを認めてよいだろう。器種構成については須恵器大甕が共通して確認されているが、小型の器種では破片で確認できたレベルでも坏や高坏、甗、台付壺や提瓶など、バラエティに富んでおり、稲荷山古墳では遠隔地から当時は相当の貴重品であった須恵器を多種・大量に手許に集積して、亡き首長の葬儀に惜しげもなく使用しており、武蔵の最高首長の権勢を象徴する葬送祭祀が垣間見えるのである。稲荷山古墳南方の小形円墳である梅塚古墳（埼玉2号墳）の周溝内からはTK47期の須恵器有蓋坏と土師器埴、須恵器模倣坏が周溝内から固まって出土している。祭祀に使用后、まとめて遺棄または放置されたものと思われ、小円墳での祭祀に用いられた土器セットが判明しているが、こうした小規模円墳における土器使用とは器種構成、個体数の面でもかなりの格差が存在している。（埼玉県教育委員会1988）

墳丘付設造出し以外で土器の比較的まとまった出土が確認された状況は、今のところ稲荷山古墳内堀北東コーナー以外では他の古墳では見いだせない。稲荷山古墳の場合、東コーナー周溝内堀発見の須恵器高坏と土師器高坏は中堤上で行われた祭祀行為で使用されたものが落ち込んだ可能性が高い。稲荷山古墳では他に、西コーナー部外堀周溝から、餅型の土製品が土師器片と出土しており、周溝外堀外方に置かれていたものが流入した可能性が強い。稲荷山古墳は墳丘の主軸をほぼ南北に取っており、長方形周溝の北東と南西はそれぞれ今風にいう「鬼門」と「裏鬼門」の方角（鬼門角）に当たる。干支の日本伝来時期は明確になっていないようだが、稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣には「辛亥年七月中記」とあり、既に5世紀後半には干支の思想は陰陽五行思想とともに伝えられているのは明らかだ。「鬼門金神」のごとき神を祀る思想があったのかどうかかわからないが、稲荷山古墳の周溝各コーナーでの土器や土製品の出土はその方角からの邪悪の侵入を防ぐための祭祀行為の可能性も考えられる。稲荷山古墳の周溝が長方形であることも東西南北の各方位を象徴する「四神相応」の配置を考慮した形態の可能性を提示しておきたい。

終わりに

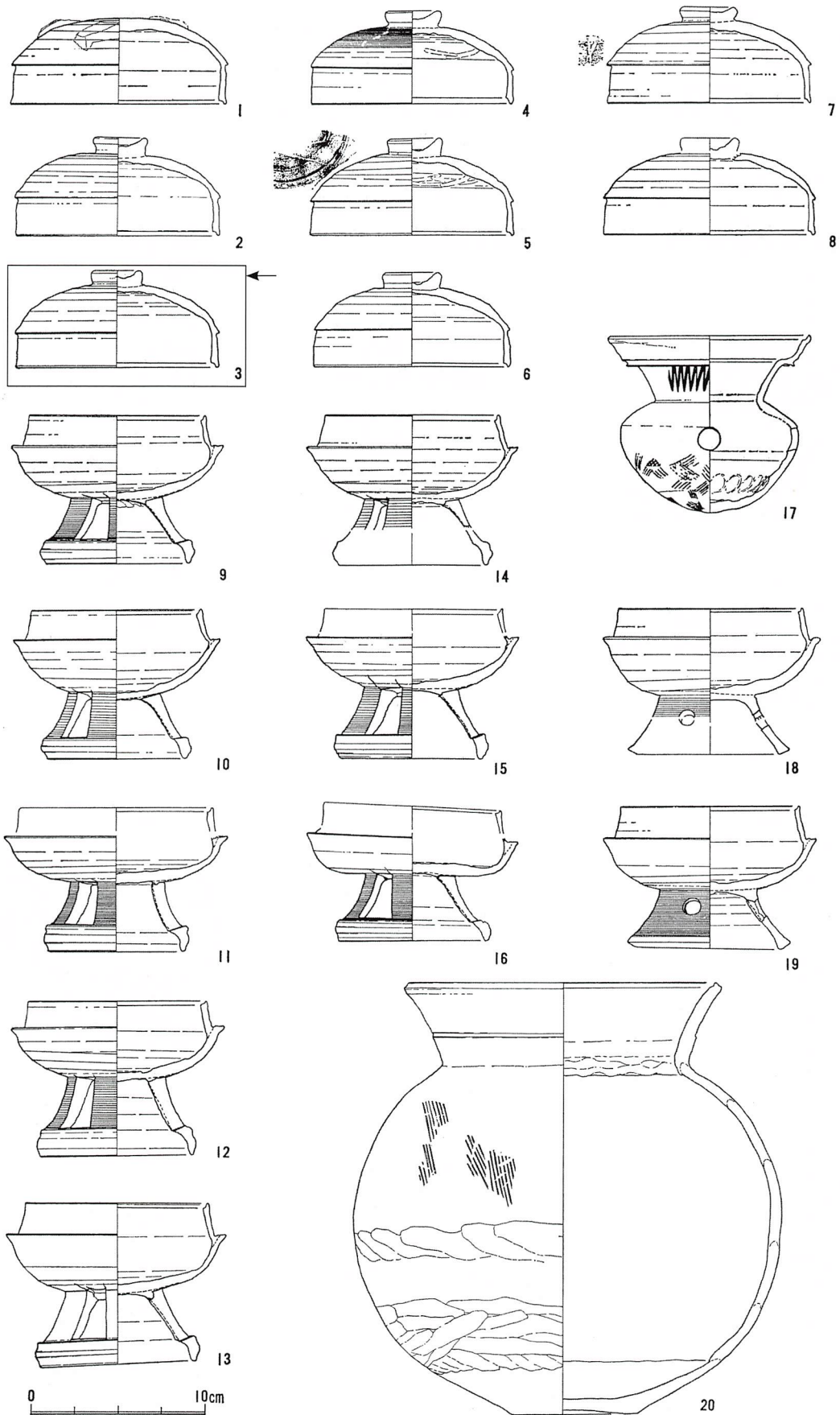
稲荷山古墳では現在のところ、元位置出土と判断できる土器はひとつもない。古墳周辺が古墳時代からこの方、地表面が削られ低下してきていることがわかっており、元位置をとどめる資料が出土するのは墳丘と周溝底に遺されたものでなければ期待は薄い。

しかし、埼玉古墳群の各前方後円墳の墳丘付設造出しが、たくさんの須恵器と土師器を使った供献・共食祭祀が行われた場所であったことは明らかである。今後は周辺や他地域の古墳祭祀での土器配置の状況分析をすすめ、埼玉古墳群各前方後円墳造出しにおける祭祀の実態を検討したい。

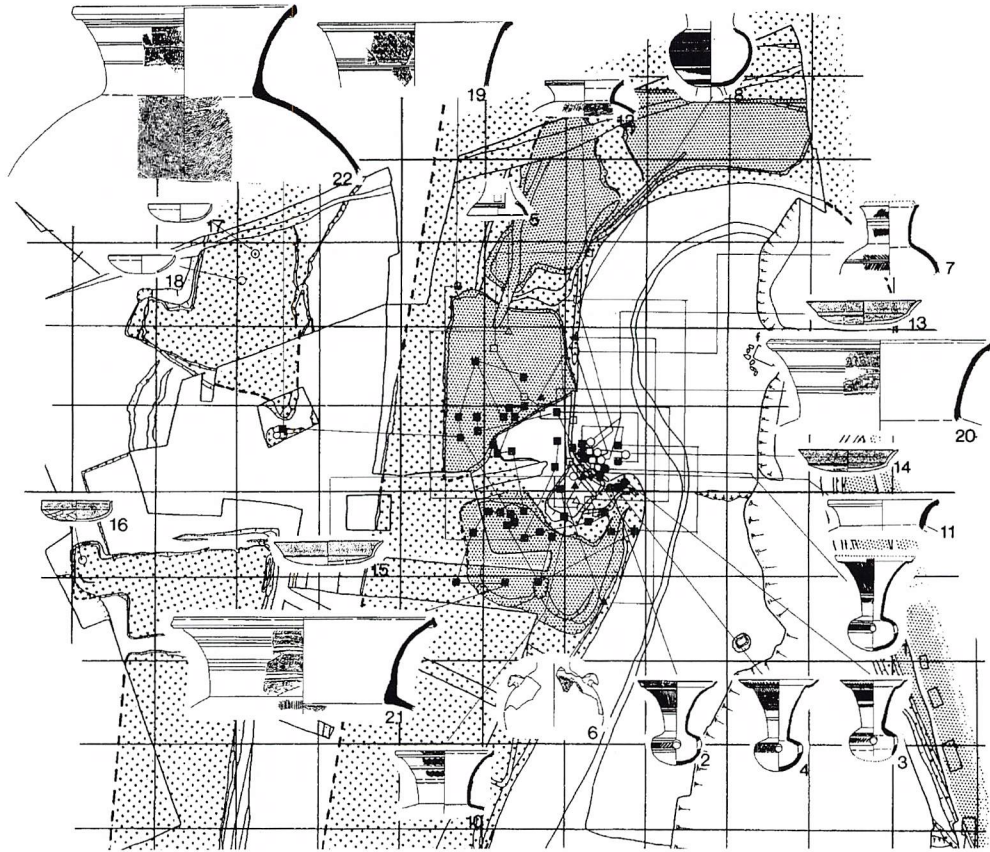
参考文献

埼玉県教育委員会1980『埼玉稲荷山古墳』

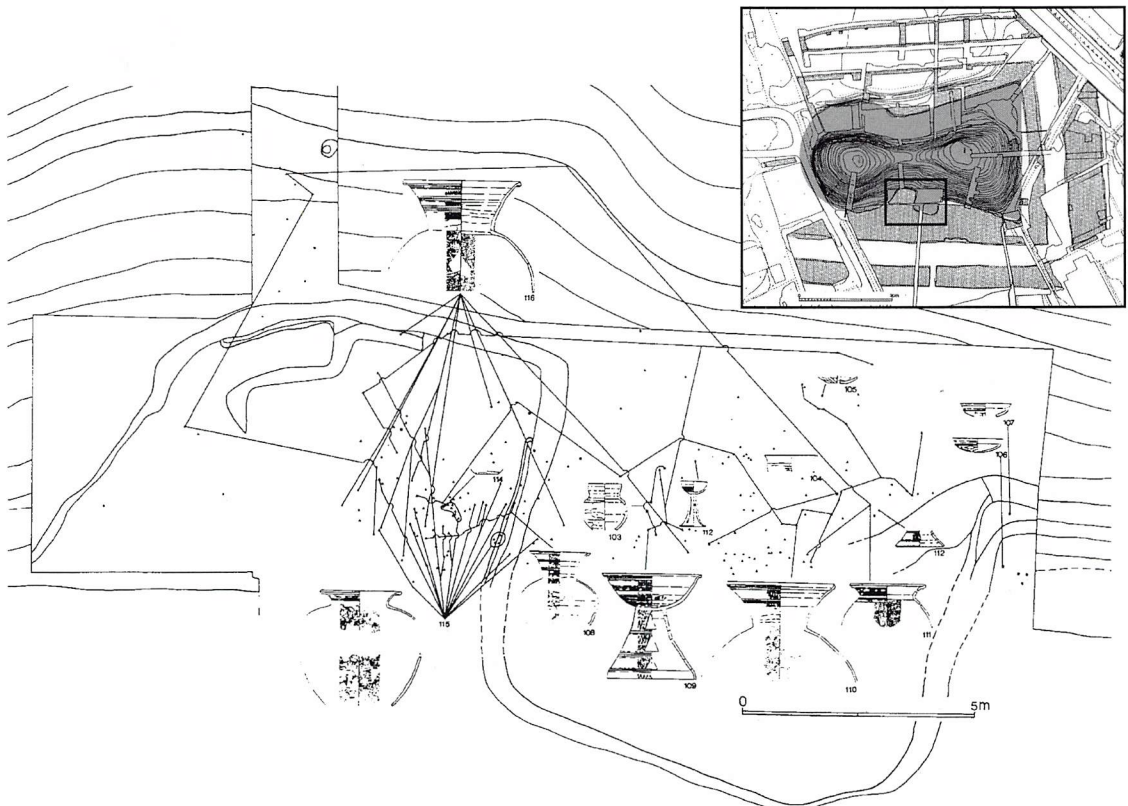
- 同上 1986『瓦塚古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書第4集）
- 同上 1988『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書第6集）
- 同上 1992『二子山古墳・瓦塚古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書第8集）
- 同上 1997『将軍山古墳』（史跡埼玉古墳群整備事業報告書）
- 同上 2007『埼玉稲荷山古墳』（史跡埼玉古墳群 埼玉稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書）



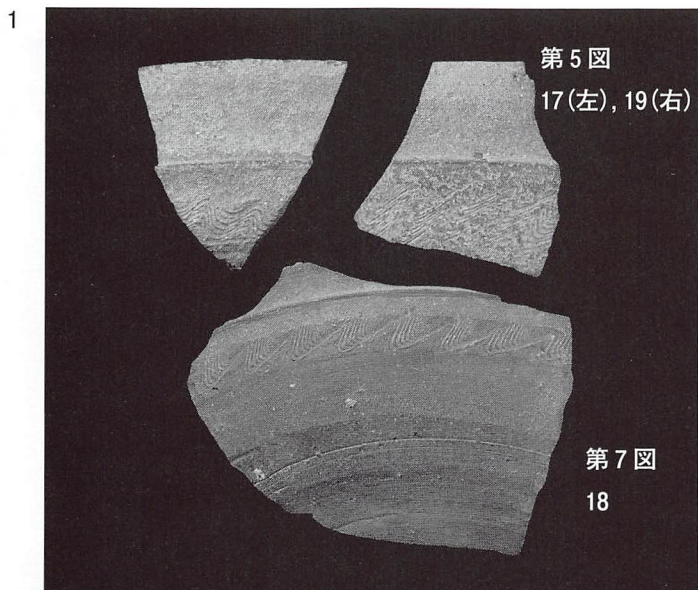
第10図 伝稲荷山古墳出土川鍋氏所蔵資料（3の四角囲みが破片の接合した高坏蓋）
（埼玉県教育委員会1980より）



第11図 将軍山古墳造出し付近での土器出土状況（埼玉県教育委員会1997より）



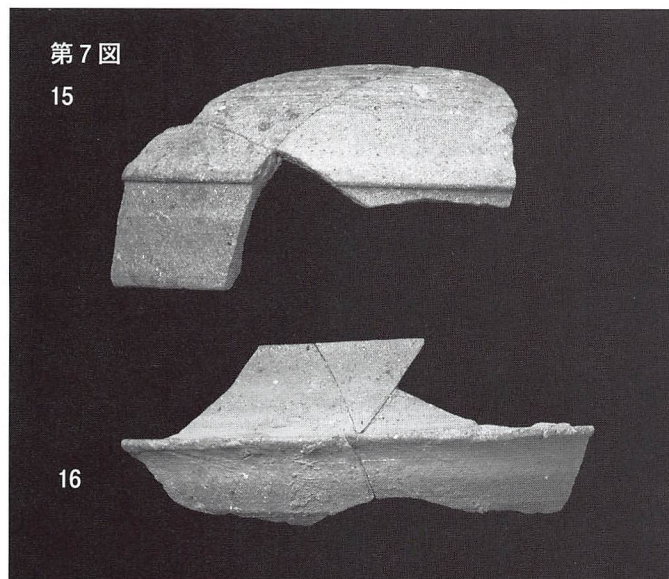
第12図 瓦塚古墳造出し付近での土器出土状況（埼玉県教育委員会1992より）



無蓋高杯 (上2点：平成9年度1区出土・下：同9年度5区出土)

2-1

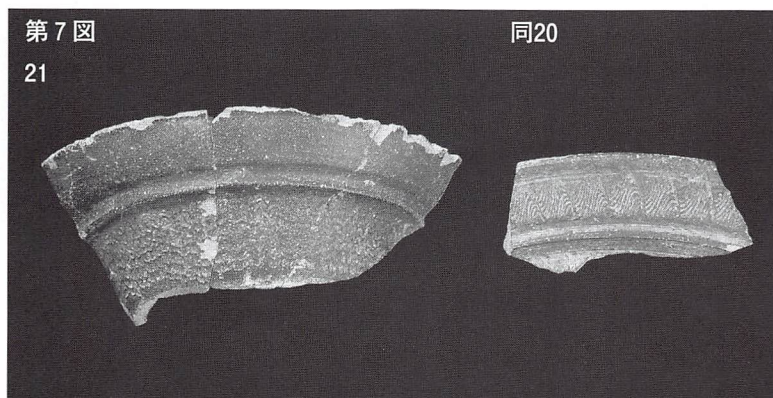
2-2



坏・身と蓋 (平成9年度5区出土)

(内面)

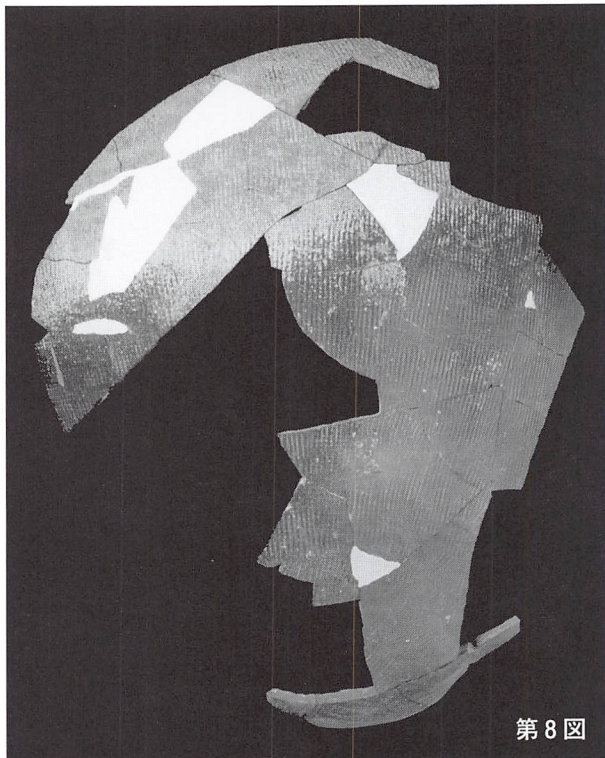
3



碗 (平成9年度5区出土)

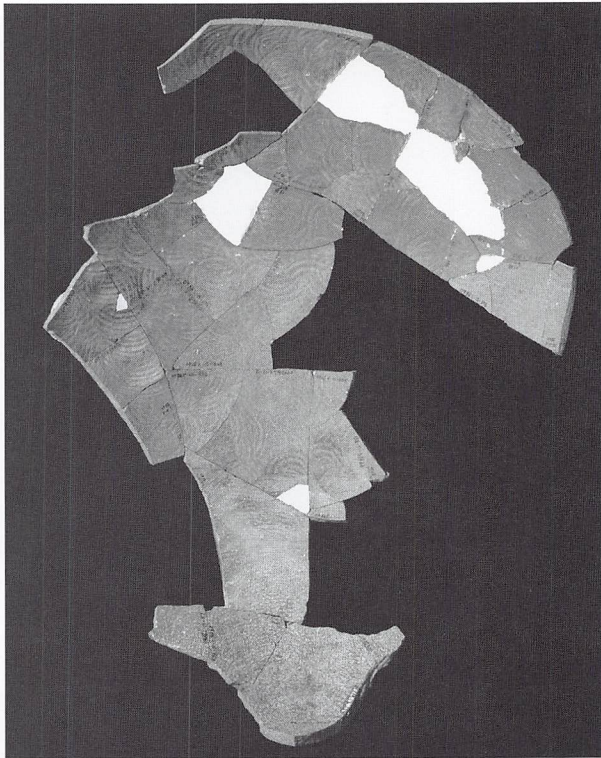
写真2

1



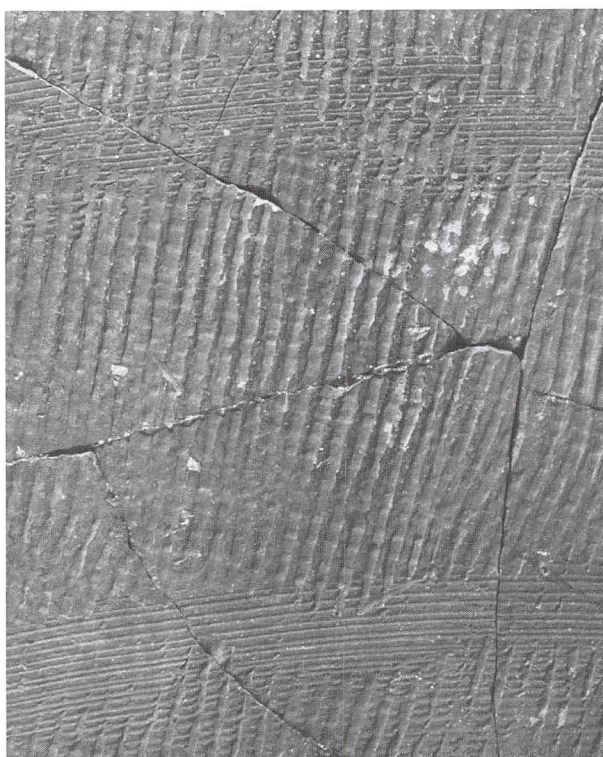
平成9年度出土甕

2



(内面)

3



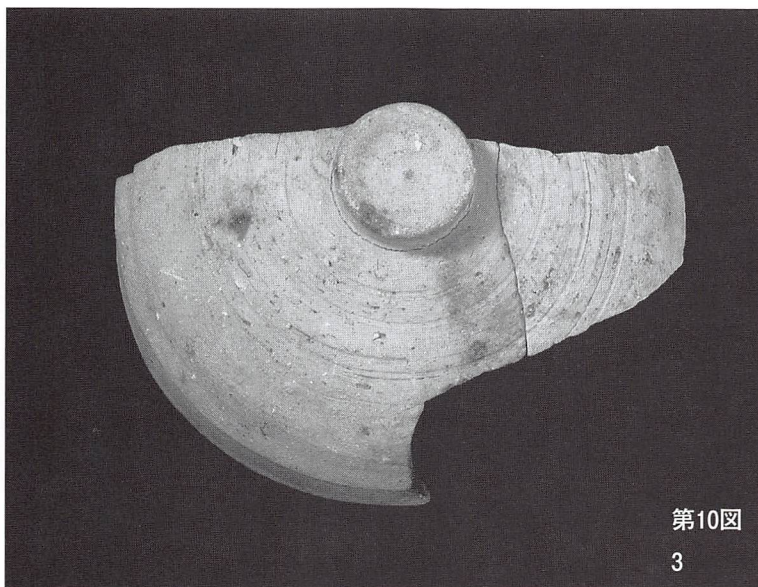
(外面拡大)

4



(内面拡大)

1-1



1-2



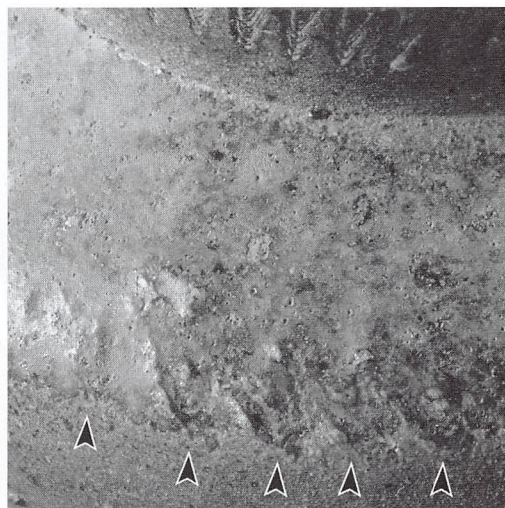
川鍋氏資料と接合した高杯蓋（右側の破片が平成9年度出土）

2-1



川鍋氏資料・甕

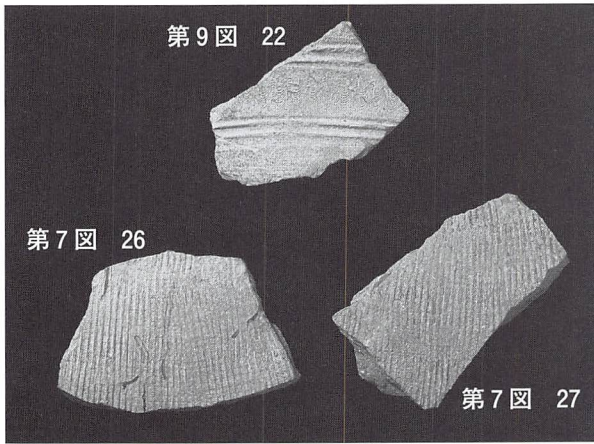
2-2



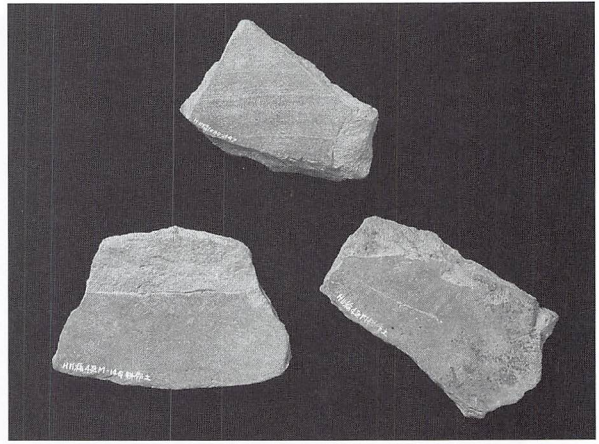
△が櫛描波状文と考えられる箇所（円孔の左側）

写真 4

1-1



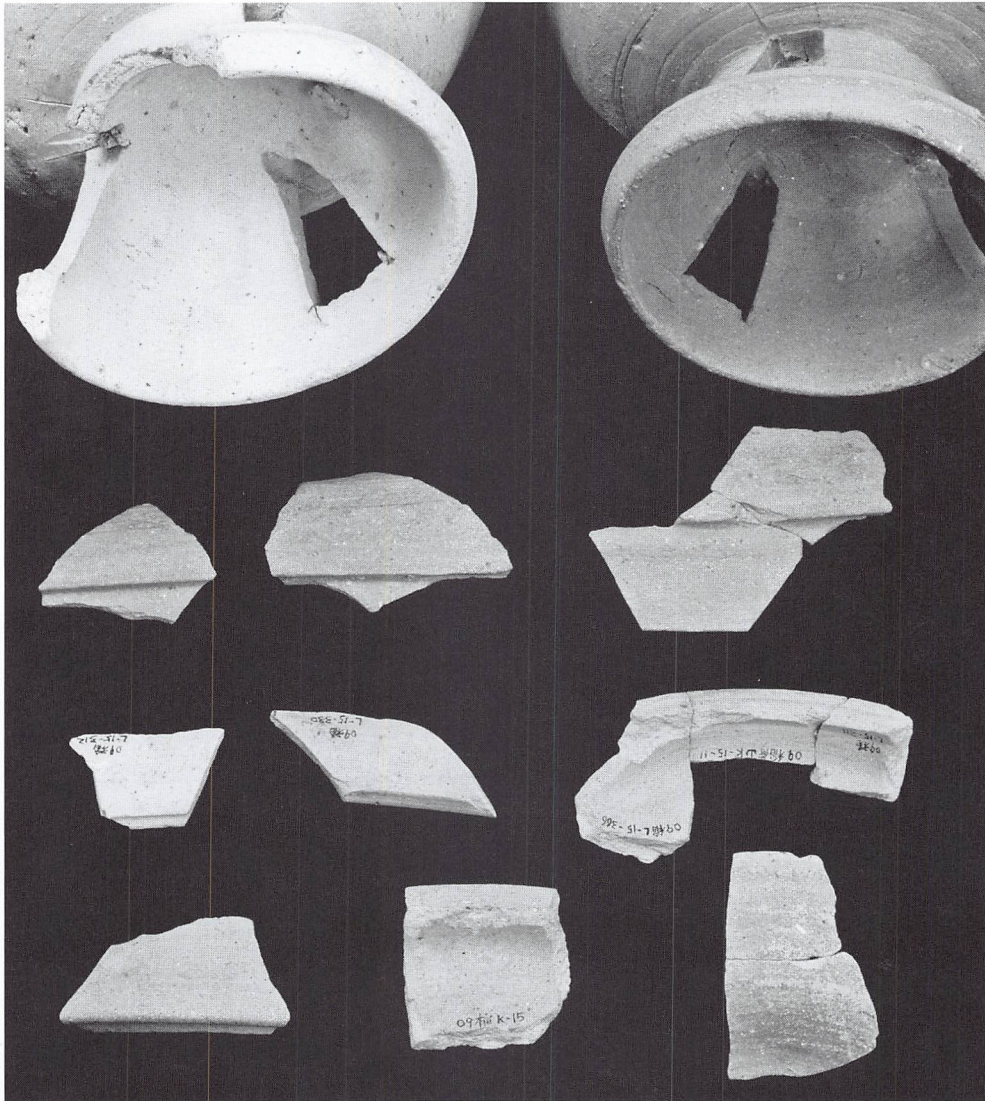
1-2



甕 (上：平成11年度1区出土、下：平成11年度4区)

(内面)

2



平成9年度5区・11年度4区出土須恵器細片と川鍋氏資料・高杯